

現職教育資料

第454号

- ◇はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- 1 学校支援ボランティア基礎知識・・・・・・・・1
- 2 学校支援ボランティア活動を受け入れるために・・2
- 3 ボランティアコーディネーター・・・・・・・・4
- ◇おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4



学校支援ボランティア



◇ はじめに

生涯学習社会を迎えて、学校と地域の連携が一層求められるようになり、開かれた学校づくりに向けた様々な取組が全国でも見られるようになってきた。そして、平成9年に出された国の「教育改革プログラム」では、「学校支援ボランティア」が推奨され、その後、中央教育審議会等でも学校支援ボランティア活動の推進が提言されている。さらに、平成13年の社会教育法及び学校教育法の一部改正では、社会教育と学校教育の連携が法に位置付けられた。このような流れを受け、本県でも、平成15年度より、県民の学習成果の活用を促進する事業の一環として学校支援ボランティア促進事業を始めた。本事業では、学校支援ボランティア活動を希望する地域の方々を対象に研修等を実施しているが、学校側の理解がなければ、効果的な学校支援ボランティア活動は成立し得ない。本資料を十分参考にして、学校支援ボランティアについて理解を深め、学校にとっても地域にとっても、さらに有意義な活動が展開できるよう努めていただきたい。

1 学校支援ボランティア基礎知識

(1) 学校支援ボランティアとは

学校支援ボランティアとは、一言で言えば、人々の自発的意思によって、学校や学校教育活動を場としたボランティア活動を指す。ボランティア活動は、自発性、無償性、公益性を三原則としていると言われるので、学校支援ボランティア活動も、これらの要素をも含んでいると考えてよいであろう。ボランティアは自発的な存在なので、学校側が一方的に「活用する」という性格のものではなく、地域住民の知識や技術を学校が主体となって活用し、時には謝金が必要となる「地域人材の活用」とは一線を画する。学校支援ボランティアの場合は、「活用する」というよりも「ボランティア活動を受け入れる」「活動の場を提供する」という視点が必要となる。当然、学校が主導で実施する部分は、学校が責任を持って進める必要があるが、可能な限り、ボランティア自らも教育活動を提案できるような環境を整え、自立

と責任を前提とした合意によって、教員のパートナーとして教育活動を担っていくという関係を構築していくことが期待される。学校が一方的に活動内容を決めることは、かえって学校の負担を重くする場合もある。

具体的に、学校支援ボランティア活動の分野を挙げてみると、次のような例が考えられる。

- ・教科指導・学校行事の支援
- ・クラブ活動などの支援
- ・道徳や総合的な学習の時間の支援
- ・校舎等の補修、清掃、校庭の美化等
- ・図書整理、教材作成、校内のパソコン整備等
- ・社会体験活動の受け入れ等
- ・登下校時の安全確保、校外活動の引率支援等

このように、教壇に立って教えることだけが学校支援ボランティアではなく、遠足と一緒に同行して、子どもたちの安全をサポートするということや、総合的な学習の時間などで、一緒に調べたり考えたりするという活動も考えられる。必ずしも、特別な知識や経験が必要なわけではない。ボランティア活動であるから、ボランティア側から自発的に、自分には何ができるのか考えることも重要である。

(2) 学校支援ボランティアの意義

【子どもたちにとって】

県内でボランティアを受け入れている小中学校では、大きな効果が現れている。『平成12・13年度学校におけるボランティア等活用実践研究報告書』(栃木県教育委員会義務教育課，平成14年3月)によれば、特に、総合的な学習の時間等で、児童生徒の「自主性・主体性」「思いやりと感謝の心」をはぐくむために学校支援ボランティアが有効であるとの報告がある。また、児童生徒が個別の課題を設定し、課題解決を図る調べ学習などでは、教員との協力のもと、学校支援ボランティアが一人一人の児童生徒の学習活動に対応し、よりきめ細かな学習支援を実現して効果を上げている事例も見られる。

【教員にとって】

学校支援ボランティアから学ぶのは子どもたちだけでない。前出の調査では、学校支援ボランティアとのコミュニケーションが教員の意識変容にも大きな影響を与えたことが報告されており、また、県内で実施された研修会でも、教員から次のような声が寄せられている。教員もボランティアも、教育活動を通じたふれあいの中から、お互いに学び合うという関係をつくっていることがわかる。

- 総合的な学習の時間で、地域の方にインタビューしたり、ふれあったりして、子どもたちが大きく変わりました。学校だけでは子どもが育たないことに気が付きました。
- ボランティアの方々の読み聞かせは、本の選び方などで私たちも参考になっています。
- マイ・チャレンジで地域に出て行き、子どもたちの職業観や地域の人とのかかわり方が変わりました。
- 琴の演奏や、小麦の脱穀など、本物に触れたとき、子どもたちの目は輝き、生き生きと活動していました。感謝しています。
- その道のプロフェッショナルとしての生き方や技を教えてくださいました。また、子どもにとって、教師以外の人にほめられるという経験も素晴らしかったと思います。記憶に残る時間となったことと思います。
- もっと何度も学校に来てほしいと思います。もっと子どもたちのそばにいて、そして、学校のことを知ってほしいと思っています。

【ボランティア自身にとって】

ボランティア活動は、本来、誰かに何かを「してあげる」というものではなく、自分自身の成長を図るという意義がある。ボランティア活動を通して、自分の新しい能力に気付き、新しい仲間ができ、交友関係が広がる。学校支援ボランティアの場合、学校を場として、教員や子どもたちとの様々な相互のふれあいの中で、教えかつ学ぶという相互学習の働きを持っている。学校支援ボランティアによって、子どもたちに必要とされるという体験をもつことは、健康的な生きがいにつながると同時に、子どもたちとの出会いによって、自分の中にある「おとな」が引き出され、眠っていた「教育力」が呼び覚まされる。学校支援ボランティアは、いわば、ボランティア自身の生涯学習となっているのである。

(3) 学校支援ボランティアはまちづくりにつながる

学校支援ボランティアの活動で目覚めた「教育力」によって、子どもたちの健全な発達のためには、より良い環境、より良い地域社会が必要であることに気づき、地域住民として、子どもの未来に対する責任を強く意識する。そして、この子どもたちのた

めに、残せるようなまちをどのようにつくっていくのかを考える契機となる。学校支援ボランティアの活動によって学校が活性化し、地域と学校が支え合っていく良い関係ができて、多くの住民が学校と協力しながら、子どもの教育を担っていく地域に変わっていく。学校支援ボランティアは、学校の教育活動の支援を通じて、未来に向かって、子どもたちに残せるまちに変えていくというまちづくり活動につながるのである。

2 学校支援ボランティアを受け入れるために

(1) 受け入れ体制の整備

① 学校支援ボランティア担当者

まず、担当者を決め、学校内にもボランティアの方々にも、学校支援ボランティアの窓口が誰であるかを明確にしておく必要がある。渉外担当、生涯学習係、社会教育主事有資格者等が候補として考えられる。

② 研修や交流会の実施・参加

学校支援ボランティアについての校内研修を実施したり、平成15年度より、県内の各教育事務所で実施している学校支援ボランティア研修会や「生涯学習ネットワーク」などの交流会に参加することによって、学校支援ボランティアへの理解が深まり、先進事例などから、そのノウハウを知ることができる。また、市町村教育委員会や社会福祉協議会でもボランティアに関する研修等を実施している場合があるので、積極的に情報を収集することが重要である。

③ マニュアル作り

学校がボランティア活動希望の連絡を受けたときの対応、ボランティアと教員の事前打合せの方法、ボランティアが実際に来校したときの手順等がわかるマニュアルを作成し、教員間での共通理解を図っておく必要がある。また、マニュアルを作成する段階からボランティアに入ってもらい、相談しながらマニュアル作りを進めることも考えられる。

④ ボランティアセンターの活用

栃木県総合教育センター、各教育事務所、各市町村にはボランティアセンターがあり、ボランティアを希望する側と受け入れ側のコーディネートを行ったり、相談に応じたりしている。学校として、どのようなボランティアを必要としているのかということボランティアセンターに積極的に情報提供することによって、学校のニーズに応じたボランティア活動が実現する可能性も高くなる。ボランティアセンターの積極的な活用が望まれる。

⑤ 情報の共有化

学校の経営計画、学年や学級の目標、学級担任や校務分掌など、学校から提供できる情報はできるだけボランティアに提供する体制をとるとよい。そうすれば、地域の情報も入ってくるようになり、学校

と地域で子どもを育てていく気運も高まる。

⑥ボランティアの環境整備

学校支援ボランティアが学校内外で活動していることが、子どもたちや教職員にわかるような掲示板等を設置したり、ボランティア同士の情報交換や活動の準備等に有効なボランティアルームを準備するなど、ボランティア活動がしやすい環境を整えることが望まれる。

⑦お礼、経費、ボランティア保険

ボランティアは自発的な活動であり、無償の行為なので、謝金を支払う必要はない。また、「無償だから活用する」という安易な感覚でお願いするものでもない。ボランティア活動に必要な材料費や運搬費、交通費などは、謝金とは異なるもので、これらの経費をボランティアが全て負担する場合もある。学校や教育委員会が一部負担する場合もある。これらについても、あらかじめ、打合せておく必要がある。また、万一に備えて、ボランティア保険への加入なども必要となるので、事前に参加しているかどうかを確認し、未加入の場合は、加入を勧めるとよい。加入については、教育委員会やボランティアセンター、市町村の社会福祉協議会などが窓口となる。

⑧ボランティアとのコミュニケーション

やはり、ボランティアの自主性を重んじ、ボランティア一人一人の考えを大切にすることが肝要である。そのためには、事前打合を綿密に行うなど、コミュニケーションのとれる時間や場を確保できる体制づくりが求められる。また、ボランティアの安全に配慮しつつ無理のない計画によって、全職員で共通理解をもちながら気持ちよく対応することが、継続性のある学校支援ボランティア活動につながっていくと考えられる。

(2)活動案づくり

ボランティアの活動内容は、教員とボランティアで事前に打合ををし、ボランティアからの提案を大切にしながら、教育活動のねらいに合致した活動案をつくりあげていくことが重要である。以下に、打合せ用紙の様式の例を示す。この用紙は、打合せの際、教員が記入し、コピーをボランティアに渡すなどするとよい。



【打合せ用紙】(例)

学校名 _____ 記入者 _____

★ボランティア

氏名		住所	
連絡方法 (優先順位)	<input type="checkbox"/> 電話 <input type="checkbox"/> FAX <input type="checkbox"/> 携帯電話 <input type="checkbox"/> メール		
来校するボランティアの人数		人	

★活動

活動日時	年 月 日 ~
対 象	学年 () 人程度
活動場所	教室 (年 組) ・ 体育館 ・ 運動場 特別教室 () ・ その他 ()
活動名	
分 野	教科 () 総合的な学習の時間 () クラブ活動・部活動 () 環境整備 () その他 ()
ねらい	
事前準備	
備 考	

★確認事項

- 来校手段 ()
- 来校予定時間 ()
- 経費の確認 ()
- 印刷物及び資料 ()
- 紹介内容 ()

★連絡先(学校)

電話
FAX

※何かありましたら記入者まで

(3)ボランティアに知っておいてほしいこと

活動を始める前に、学校内のことや子どもたちのことについてあらかじめ知っておいていただくと、トラブルのないスムーズな学校支援ボランティア活動を進めることができるので、事前打合せの中で、例えば次のような事項を伝えておくとよい。

- ・学校の目標や仕組み
- ・守秘義務、子どもの人権
- ・学校の一日の流れ
- ・各発達段階における子どもの特徴や習熟度
- ・子どもへの接し方、授業の進め方
- ・学校で使われている専門用語

3 ボランティアコーディネーター

(1) コーディネーターの役割

ボランティア活動が盛んになってくると、学校がボランティア活動をしてくれる人を探してもなかなか見つからなかったり、公民館や市町村教育委員会生涯学習課などでボランティアを募集し紹介しても受け入れが少ないこと、また、ボランティアや受け入れる学校の活動に対する悩みなどの問題も出てくる。このような問題を解決するために、コーディネーターが必要になる。コーディネーターとは、ボランティア活動をしたい人とボランティアを受け入れたいと考えている学校の間立ち、両者を結びつけるのが主な役割であるが、それだけではなく、学校と地域の人々が協力して教育活動を円滑に進めていくことができるように調整していくという役割も担っている。具体的には、次のような活動が考えられる。

① つなぐ

ボランティアバンクづくりや人材紹介などを行いながら、学校のニーズとボランティアの意思、提案を調整し、実際の活動につながるように調整する。

② 知らせる

学校のニーズや学校の情報をボランティアへ、ボランティアの意思や提案、人材の情報を学校へ知らせる。学校だよりや学年通信、PTAだよりなども大切な情報源となる。

③ 育てる

ボランティア活動が円滑に進むよう、学校のしくみや子どもの実態などを学ぶ機会を提供したり、教員を対象とした、ボランティアや地域社会についての研修を提供する。

④ 支える

ボランティアや教員のとまどいや悩み、トラブルに対して、相談を受けたり、アドバイスしたりする。また、そのために打合せ時間の設定など両者の円滑なコミュニケーションの場をつくる。

(2) コーディネーターの様々なかたち

コーディネーターとして実際に活動するのは、学校の先生やPTA役員、学校支援ボランティア、ボランティアセンター職員や社会教育主事等、あるいは、地域やボランティア団体が組織として行うこともある。学校の規模や地域の実態、PTAの活動の状況などによってその在り方は多様である。それぞれの実態に合わせて検討していく必要がある。

① 教員がなる場合

学校の規模に応じて、管理職や社会教育主事の資格を取得した教員などがなる場合がある。その場合でも、できる限り複数の教員やボランティアに参画していただき、アドバイスをしてもらおうとよい。

② ボランティアがなる場合

地域でネットワークをもち、活動経験のあるボラ

ンティアはコーディネーターとして活躍することができる。その場合も、学校側にも教員の担当窓口を設置する必要がある。

③ PTA役員や保護者がなる場合

PTAの活動として学校支援ボランティアに取り組むことは、学校とのコミュニケーションも円滑に展開できて効果的であり、コーディネーターとしてもふさわしい。

④ 組織で担う場合

教育委員会や公民館、自治会や町内会の役員などによって構成される地域ぐるみの組織がコーディネーターとなる場合がある。組織で行う場合、一人一人の負担が少なく、継続的なコーディネーターとしての活動が期待できる。

ボランティア コーディネーター 学校



つなぐ、知らせる
育てる、支える

◇ おわりに

学校支援ボランティア活動は、学校にとっても、ボランティアを始めとした地域住民にとっても、そして、何より、子どもたちにとって、意義深い活動であり、地域の教育力が活性化し、ひいては、よりよい地域づくりにつながっていくという広がり期待される活動でもある。そして、学校の姿勢や受け入れ体制が学校支援ボランティア活動の成否の鍵となっている。学校として、あるいは、教員として、学校支援ボランティア活動に理解を深め、活動を活性化していきたいものである。

参考文献

「さあ、はじめよう、学校支援ボランティア」栃木県教育委員会

「先生がボランティアと出会ったときに」塩谷地区ふれあい学習企画委員会

「地域の学校づくり」芳賀教育事務所ふれあい学習企画委員会・芳賀教育事務所ふれあい学習課

